【実践報告４】新城市立八名小学校

１　はじめに

本校は八名中学校における先行研究に加わる形で，令和２年度から本研究への取組を始めた。本校の教育目標は，「心豊かで　たくましく生きる　八名っ子の育成」である。この目標に向かい，研究１年目はグランドデザイン策定を目標に，「現状把握シート」「ＳＷＯＴ分析シート」「検討用シート」「実行策検討シート」を用いて研究を進めた。

２　実践

(1) グランドデザインの策定・周知と教育目標の共有

ア　グランドデザインをどのように策定したか

現状把握シートから，児童の強みと弱みが明らかになった。強みを生かしながら弱みを克服し，教育目標に迫るために，身に付けさせたい資質・能力を「自分で考え，みんなで深める力」とした。ＳＷＯＴ分析シートでは，外部環境及び内部環境が明らかとなり，子どもの強み，弱みとの関わりが見えてきた。実行策検討シートでは，本校の課題や改善点が見えてきた。全職員で話し合い，改善点を「事後に生かせる授業，行事のメモの共有」「事後に生かせる評価方法の統一」「『対話的な学びの姿』を視点とした授業研究の実行」の三点に絞った。そして，目標に迫るための方策として，「八名っ子トーク」「各教科の授業」という二つの軸を中心にして実践を進めていくことにした。以上のような現状把握，目標設定，目標に迫るための方策をグランドデザインにまとめた（**資料１**）。目標の山へ登るイメージを，親しみやすいイラストと直感的に把握しやすいレイアウトで表現した。

【資料１　グランドデザイン】

イ　グランドデザインの周知をどのように行ったか

学校新聞での周知を行った。その中で教育目標や目指す子ども像などを保護者や地域に伝えた。

ウ　周知によって，どのような変容が見られたか

全校児童への学校評価アンケート結果（**資料２**）から，学校生活において子どもたちが学習や行事等に意欲的に取り組み，分かる喜びを感じるようになったと言える。保護者への学校評価アンケートの結果（**資料３**）から，多くの保護者が学校の教育方針を理解し，子どもたちが「目指す姿」に近づいていると実感していることが分かる。

【資料２　児童アンケート】

質問項目	Ｒ２	Ｒ３
学校の授業は楽しい	54.3%	85.1%
学校の授業は分かる	76.1%	92.6%
学校には楽しみな行事がある	68.7%	89.7%

【資料３　保護者アンケート】

質問項目	Ｒ２	Ｒ３
子どもに，自ら学ぶ習慣が身に付いてきている	80.3%	88.4%

(2) 目標に基づくカリキュラム・マネジメント

ア　カリキュラム・マネジメントをどのように進めてきたか

本校ではカリキュラム・マネジメントの軸として，八名っ子トークを行っている。八名っ子トークとは，学級での話し合い活動である。テーマに沿って提案者が発表し，それについて思ったことや考えたことを学級で伝え合っている。

イ　カリキュラム・マネジメントを進める上で工夫したことは何か

今までの反省点と身に付けさせたい資質・能力を意識して八名っ子トークを改善した。具体的には，トークのテーマの選定や進め方，座席の位置などを改善した。また，研究活動と学習指導要領の関わりについて構造を明らかにし，研究マップとして可視化した（**資料４**）。教育目標，研究に関わる教科の学習指導要領の抜粋，八名っ子トークに関わる学習指導要領の抜粋，地域教材を学年ごとにまとめたものである。校内の現職研修の部会「授業研究部」「八名っ子トーク部」「カリキュラム・マネジメント部」の主な活動内容も記載し，研究の概要を一枚で見渡せるようにした。

【資料４　八名小研究マップ（部分）】

ウ　カリキュラム・マネジメントを行い，どのような変容が見られたか

ふだんの様子から，教師は児童の「話す力」は伸びていると感じるが，自分たちとしては十分にはできていないと考えている児童が多いことがアンケート（**資料５**）から分かった。

【資料５　児童アンケート】

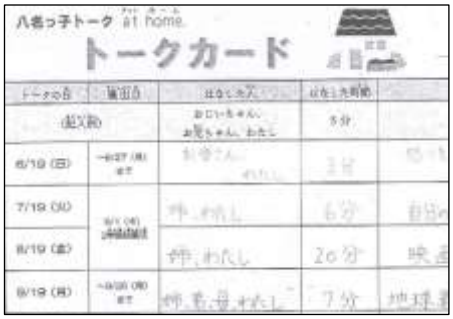
質問項目	Ｒ２	Ｒ３
授業中に意見や質問が言える。	74.8%	71.2%
授業中に先生や友達の話を聞いている。	81.8%	93.0%
家の人に学校のできごとを話している。	73.2%	79.9%

【資料６　保護者アンケート】

質問項目	Ｒ２	Ｒ３
学校は八名っ子トークや授業を通して，子どもたちが「自分で考え，みんなで深める力」を身に付けられるように取り組んでいる。	調査なし	97.2%
教師は子どもたちが意欲的に学べるように指導方法を工夫している。	調査なし	94.6%

また，「聴く力」は育ってきていると判断でき，家族に進んで話をしていることも分かり，**資料６**からは，多くの保護者が学校の教育方針を理解し，子どもたちが「目指す姿」に近づいていると実感していることが分かった。

【資料７　トークカード（表・部分）】



(3) 地域と目標を共有し，連携・協働した実践

ア　地域との協働をどのように進めてきたか

研究当初より，さまざまな授業で地域と目標を共有しながら，連携や協働を進めてきた。また，軌道にのってきた八名っ子トークを，家庭でも行うようにした。八名っ子トークの家庭版を「八名っ子トーク アットホーム」という名前にした。教育目標を共

有しながら家庭と協働することによって，児童の活動の幅を広げることを目的とした。方法は，毎月１回「トークの日」「はぐみんデー」である19日に合わせて，家族で話し合いをし，トークカード（**前ページ資料７**）に，「時間」「人数」などを記入するようにした。初めて行ったアットホームでは，児童一人当たりの参加人数の平均は約2.89人で，最大は６人（**資料８**），児童一人当たりの活動時間の平均は約6.7分で，最大は30分であった（**資料９**）。初の試みということで，トークのテーマは学校から複数提示し，各家庭で選べるようにした（**資料10**）。マンネリ化しないように毎月新しいテーマを提示しながら進めた。

【資料８　児童一人当たりの参加人数】

学級	1年	2松	2竹	3年	4松	4竹	5年	6年	全校
平均	2.55	2.96	3.06	3.03	3.11	2.68	2.79	3	2.89
最大	5	5	5	5	5	5	6	6	6

【資料９　児童一人当たりの活動時間】

学級	1年	2松	2竹	3年	4松	4竹	5年	6年	全校
平均	*5.69*	*8.41*	*7.41*	*7.1*	*8.72*	*5.3*	*6.3*	*4.72*	*6.70*
最大	*10*	*19*	*28*	*30*	*28*	*19*	*20*	*10*	*30*

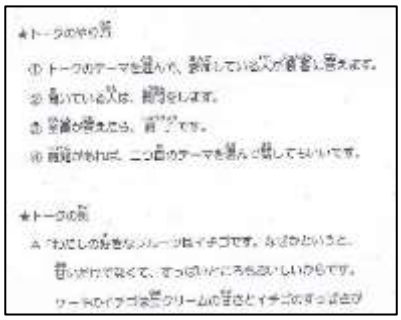
【資料10　トークのテーマ】

・好きな色は？　・好きな花は？　・行ってみたい国はどこ？　・無人島に一つ持っていけるとしたら何を持っていく？　・タイムマシンがあったら，どの時代に行きたい？　・自分で考えたテーマ

イ　地域と協働を進める上で工夫したこと

八名っ子トークを家庭で実施するに当たって，学校だよりで全校の児童，保護者にその意義を説明した。トークカードの裏面（**資料 11**）には，初めて参加する人にも分かりやすくするため，トークのやり方や例示，グランドデザインを記載した。

【資料11　トークカード（裏・部分）】



ウ　地域と目標を共有し，どんな変容が見られたか

資料12から，家族や地域の人と関わりをもち，進んで話をしたり，ともに学習や活動をしたりすることに喜びを感じていることが分かる。これらの結果から，保護者は，学校の教育活動や地域の活動を通して，子どもの地域のものや人に対する興味・関心，またそれらを活用して学習などに取り組もうとする意欲の高さを感じたり，学校がそれらを積極的に活用したりしていることに一定の理解を示していると捉えられる。 ③④の数値が下がっているのは，コロナ禍の影響が大きいと考えられる。

八名っ子トークアットホームでの児童の感想（**次頁資料13**）では，八名っ子トークを家庭で楽しんでいる様子がうかがえた。他にも，「お父さんの好きな色が赤色と知って，びっくりしました」という感想もあり，家族の会話のよいきっかけになっていることも分かった。

【資料12　保護者アンケート】

質問項目	Ｒ２	Ｒ３
①子どもは「あいさつ」を心がけ，友達や地域の人に自分からあいさつをしたり，あいさつを返したりしている。	87.5%	88.4%
②学校は，地域の三宝（人・自然・歴史や文化）を活用して教育活動をしている。	92.7%	92.5%
③子どもは地域行事に積極的に参加している。	78.7%	70.5%

④学校は子ども園や中学校との連携に努めている。	94.6%	91.0%

【資料13　児童の八名っ子トーク感想より】

兄ちゃんは難しい言葉を使っていたから，僕にはよく分からないところもありました。僕も兄ちゃんみたいにかしこくなりたいと思いました。～中略～　お母さんに，「僕たち何分トークしてる」と聞くと，「20分ぐらいやってるよ」と言いました。家族と話すのは，楽しくて，あっという間でした。次のトークの日も楽しみです。（２年生）

３　実践の成果と課題

⑴ グランドデザインの策定・周知と教育目標の共有について

グランドデザインを全教職員で共同制作することによって，目標や目標に迫るための方策について共通理解を進めることができた。また，登山をモチーフにしたデザインは途中から研究に参加した職員にとっても分かりやすいものであった。地域への周知に関しては，今後も学校活動を通して継続的に発信をしていく必要があると考えている。

⑵ 目標に基づくカリキュラム・マネジメントについて

カリキュラム・マネジメントの実践では，軸となる八名っ子トークの成果が挙げられる。トーク活動を生かして，各教科での授業を活性化することができた。今後は，更に質を向上させるために，相手意識を高め，職員の板書による話し合いへの支援などの技術向上の方策を考えていきたい。

また，研究３年目となる令和４年度１学期に３回の研究授業を実施した。３回とも国語科の実践になった。**資料14**は，研究授業における教師と児童の発言回数の比である。教師の発問に対して，児童の発言の多いことが分かる。「〇〇さんに質問です」「〇〇さんの意見と似ていて」「〇〇はどういうことですか」「どうして〇〇と考えるのですか」などの話型は，毎朝の八名っ子トークで自然に出てくるようになってきている。そのような毎日の実践の積み重ねが，授業での話し合い活動に生かされていると考えられる。「自分で考え，みんなで深める」という目指す児童像にとって，話し合いを充実させる八名っ子トークの果たす役割はとても大きいと言えるだろう。

【資料14　教師の発問と児童の発言回数の比】

６年生国語科「風切るつばさ」……教師１：児童７
４年生国語科「走れ」……教師１：児童６
３年生国語科「『ほけんだより』を読みくらべよう」
……教師１：児童２

⑶　地域と目標を共有し，連携・協働した実践について

地域との協働実践では，児童の主体的な活動，教科書だけでは得られないであろう幅広い知見の獲得などが挙げられる。また，講師との連携を密にすることで一層有意義な活動につながると考えられる。３年生の社会科では，地域の柿づくりについての授業を行った。この授業は，他の授業に関わった地域の方が「他にもこういう人がいるよ」という情報をくださったことがきっかけであった。学校の教育目標や教育活動を理解してもらったことが，児童の学びの広がりにつながった例として挙げられる。

４　おわりに

本研究を通して，私たちは地域との協働を授業に多く取り入れてきた。その結果，学校教育を理解し，協力してくれる方が徐々に増えてきた。今後は，更に教育目標やグランドデザインの周知を行いながら，工夫や改善をしていきたい。既に八名っ子トークの活動では，異学年の学級による相互参観の取組を始めている。「自分で考え，みんなで深める」児童の育成のために，これからも実践を積み重ねていきたいと考えている。